

## 祐天伝の諸本と成立について

北 城 伸 子

### はじめに

寛文十二年（一六七二）、下総国羽生村で浄土僧・祐天が累を濟度したという、いわゆる「累説話」は、近世を通じて広く語り継がれ、様々な文芸作品へと取り入れられた。<sup>(1)</sup>また、この時怨霊を解脱へと導いた祐天は、稀代の名僧として江戸市中から絶大な支持を受けたという。<sup>(2)</sup>

服部幸雄氏は、こうした累説話が長きにわたり好まれつづけた理由として、説話の底流にある因果律が、江戸人の宗教感覚と深くつながっていたことを挙げている。<sup>(3)</sup>同時に氏は、芸能作品の一流をなした（累もの）の原拠として元禄三年（一六九〇）刊『死霊解脱物語聞書』（以下『解脱物語』と略記）を指摘、加えてこの作品の主題について以下のように述べている。

この書物の内容―そのテーマとなるものは、要するに『祐天上人一代記』の一齣として展開する浄土教布教のための説教譚に他ならない。名主と累の死霊との対話、死霊の要求する念仏興行や石塔建立等々、いずれをとってみても、実に詳細を極めた浄土教教義の啓蒙に満ち満ちている。<sup>(4)</sup>

一方堤邦彦氏も、近年累説話の発生源について「累伝説は当初から独立した一篇の奇談として生成・筆録されたわけではなく、祐天一代記の一コマに点描された教化譚のひとつにすぎなかった」とされている。<sup>(5)</sup>つまりこうした指摘からすれば、『解脱物語』の成立源は浄土教布教のために編まれた祐天一代記に求めるべきであり、さらにまた『解脱物語』の主題を明らかにしようとするれば、一代記に遡って考察を加えなければならない、というこ

とになるだろう。

右のような視点から、郡司由紀子氏が全国に四散した祐天の一代記を調査、系統付けられたのは評価に値する。しかし残念なことに、現在この調査は継続されておらず、新たな資料に関する報告はあまりなされていない。<sup>(8)</sup>そこで本稿では、わずかではあるが新たに調査した資料について紹介し、分類を試みたいと思う。さらに祐天一代記の成立源に遡って考察を加え、累説話との相互関係について再考してみたい。江戸の人々に絶大な人気を誇った僧侶の伝記は、いかにして成立したのか。このことを明らかにすることは、累を愛し続けた当時の人々が抱いた宗教意識を考えるうえでも、決して無意味ではないだろう。

一

すでに郡司氏は、祐天の一代記を次のように分類されている。<sup>(9)</sup>

【郡司氏の分類】

I 漢文体の伝記

II 実録として流布していたとされるもの

III 講釈の筆録

IV 読本として脚色されたもの

V 靈験譚の集成

VI その他

この分類に基づき、新たに調査した資料を列挙すると次のようになる。同一の書名が多いので、請求記号を付すことにした。

I 漢文体の一代記

① 『祐天大僧正傳』(享和二年刊・一冊・恵頓著、仏教大學図書館・二五四―六二)

II 実録として流布していたとされるもの

② 『祐天大僧正御傳記』(文化十二年写・一冊(二冊目以降欠)・仏教大學図書館・宗書一八一)

③ 『祐天大僧正御傳記』(明治十八年写・十六卷六冊・大谷大學図書館林山文庫・宗大一〇六―二九)

④ 『祐天上人御實傳記』(『西行法師一代記』と合刻・一冊・大谷大學図書館桶丘文庫・餘洋八〇八一)

(a) 類似した序文をもつもの

⑤ 『祐天一代記』(写・十卷五冊・仏教大學図書館・宗書六〇三)

⑥ 『祐天大僧正御一代記』(写・十六卷五冊・仏教大學図書館・二五四―六四)

⑦『祐天大僧正御傳記』（慶応三年写・三卷三冊・後小路薫氏蔵）

⑧『祐天大僧正御傳記』（写・十卷三冊・架蔵）  
(b)部分的に抜書したもの

⑨『江戸増上寺三拾六世大僧正祐天傳記抜書』（写・一冊・架蔵）

IV読本として脚色されたもの

⑩『祐天上人一代記』（享和四年刊・六卷六冊・後小路薫氏蔵）

⑪『祐天上人一代記』（享和四年刊・二冊（三卷目以降欠）・仏教大学図書館・宗書一六二）

⑫『祐天上人一代記』（刊年不明・一冊・大谷大学図書館  
林山文庫・宗大一一〇〇六）

V靈驗譚の集成

⑬『祐天大僧正利益記』（九州大学松濤文庫・第四部A  
四・八五）

⑭『祐天大僧正利益記』（文化五年刊・祐海著・祐全補・三冊―大谷大学図書館・内宗大四四三、大谷大学林山文庫・宗大一一〇六三八、仏教大学図書館・二五四―一一九、  
仏教大学図書館・宗書一六三、仏教大学図書館極楽寺文庫六〇四、仏教大学図書館天性寺文庫二八三（ただし副

本として中・下各二冊）、写本三冊  
仏教大学図書館・二五四―六三）

VIその他

(a)寺院から刊行された略縁起

⑮『日本神仏加護由来大数珠略記』（天保四年刊・法蔵寺版・一冊・大谷大学図書館補丘文庫・餘大七六五四）

⑯『祐天大僧正極略縁起』（都立中央図書館蜂屋文庫「縁起叢書」第七冊之一五、「略縁起集成」第一巻所収）

⑰『羽生村かさ弥并助得脱略縁起』（国立国会図書館「諸国寺社諸縁起」第一〇冊之一三、「略縁起集成」四巻所収）

(b)その他

⑱『かさね物語』（写・一冊・架蔵）

I①には享和二年の刊記がある。『国書総目録』には享和二年刊として内閣文庫、宮内庁書陵部、大正大学本が挙げられるが、本文の異同から、大正大学本と内閣文庫A本を含む版本ア、宮内庁書陵部本と内閣文庫B本を含む版本イのグループに分けられる<sup>10</sup>。版本アのグループは、十二丁表九行目を「薩藩浄岸」とするのに対し、イのグループは「薩藩浄巖」とする。また十七丁裏三行目をアでは「七月九日」とするところ、イのグループは

「七月六日」とする。①はこの二ヶ所の表記がアと同じなので、版本アの系統に属する。

Ⅱは活字版として、昭和三年刊に早稲田大学出版部から刊行された『祐天上人』（『近世実録全書』八所収）がある。このⅡ系統は実録体小説という分類がなされているが、実録が「時の好みに応じて虚構を加え、増大して種々の異名・異本を生む」という特質を持つのに対し、<sup>(11)</sup>Ⅱの諸本間ではそれほど説話数に増減がない。そこから考えれば、実録とは異なる受容がなされていたのかもしれない。このうち(a)はいずれも、宝暦十三年に江戸麻布三谷山正善寺において令導和尚が語った説法の聞書である、と断る序文をもつ。一方、(b)は(a)を部分的に抜き書きしたものである。ここに収録されるのは「祐天雲天寺にて説法繁盛の事」「水藩深合源左衛門妻病死遺言の事」「儒者窪田伊織と問答の事」「山田にて念佛を弘め給ふ事」の段のみであり、(a)の説話数の半数にも満たない。(b)がどのような必要に応じて抜き書されたのかは不明だが、Ⅱがその後Ⅲへと展開していくことからすると、講釈師が高座に手控えとして持参したものだっただけかも知れない。

ⅣはⅡによってさらに荒唐無稽化した読本である。⑩

の刊記は「弘化三年丙午正月吉日心齋橋通唐物町 河内屋太助」となっているが、あとの刊記と巻末広告が享和四年本（成田図書館所蔵本）と一致している。<sup>(12)</sup>ここからすれば、⑩は享和四年本の後刷本だと考えられる。すでに享和三年版『祐天上人一代記』と享和四年版『祐天上人御一代記図会』が同じではないかとされていることを考え合わせると、<sup>(13)</sup>『祐天上人一代記』は享和三年、四年に次いで弘化三年まで版が重ねられたことになり、比較的読まれていたことがわかる。⑪は三巻目以降が欠損しているため、⑫は刊末広告や刊記は付されないため、刊年はわからない。

Vは靈験譚を集めたものである。⑭は版本としてかなり流布しようだが、⑬は九州大学のみに残る写本である。⑬の内容は、大谷大学図書館蔵『祐天大僧正御化益日記』（以下『御化益日記』）と一部重なる。<sup>(14)</sup>靈験譚といっても治病譚などの現世利益的なものではなく、祐天の言葉によって信者の精神態度が改められる、といった内容で全体が構成されている。重複する箇所をまとめると、〈表1〉になる。

表から明らかなように、⑬にある記事はすべて『御化益日記』に含まれる。逆に『御化益日記』にあつて、⑬

(表1)

⑬ 九大本 「祐天大僧正利益記」	丁数	大谷本 「御化益日記」丁数
1 大僧正御本地之事	一〇―二ウ	二十ウ―二十四ウ
2 (近習の弟子へ御教化の事)	二ウ―三ウ	三十二ウ―三十三ウ
3 (喜兵衛へ教化の事)	三ウ―六オ	五十六ウ―五十九オ
4 (武士某へ教化の事)	六オ―七ウ	五〇オ―五十一オ
5 (某へ教化の事)	七ウ―八ウ	五十二ウ―五十三オ
6 (儒者へ教化の事)	八ウ―十ウ	六十一オ―六十二ウ
7 (寺田市右衛門へ教化の事)	十ウ―十五オ	六十三ウ―六十九オ
8 南都大仏殿大堂建立に付 御名号数多御寄付の事 附所々御寄付之事	十五オ―十六オ	三十五ウ

※( )は、内容から筆者が付した。

には見られない記事がある。また文言を比較すると、⑬では「近習の弟子」(二丁裏)「織田丹後守殿家臣寺田市右衛門」(十丁表)などとされる人名が、『御化益日記』では「我等」(三十二丁裏)や「私」(六十三裏)のように記されることがある。このことからすれば、『御化益日記』のほうがニユースソースにより近いように思えるが、両者の前後関係については今後もう少し詳しく検討を加える必要がある。

VI (a)は寺院から刊行された略縁起の類である。⑮は天

保四年に、累と助の菩提寺である法蔵寺から刊行された。祐天が累を濟度した際に使用した大数珠の由来を説く。国立国会図書館所蔵『開帳免許帳』には宝暦元年七月から九月まで、『武江年表』には天保四年四月二日から江戸の回向院において法蔵寺が開帳を行った記録が残る。<sup>(15)</sup>⑮は刊記から、おそらく天保四年の開帳にあわせて刊行されたものだろう。⑯は祐天が中興した専称院から出された略縁起であり、専称院所蔵の累濟度の大数珠や真筆の名号などについて解説がなされる。刊年は不明。⑰は祐天の高弟・祐海が開いた祐天寺から出されたものである。祐天寺は寛延元年四月、明和三年四月、安永九年四月、享和二年三月、文化十三年四月と比較的頻繁に開帳していたようである。<sup>(16)</sup>刊年は不明だが、この書もこうした開帳の際に配布されたものであろう。累説話が伝承された経路として、芸能作品に限らず、開帳や略縁起が大きな役割を果たしていたことは、興味深いことだと思う。<sup>(17)</sup>最後に挙げた(b)⑱は累説話のみを筆録した写本である。内容は概ね「解脱物語」によるが、助が解脱を遂げる部分については省略されている。後述するが、IIには累説話を別本として扱うものがある。

⑱はこうして流布したものの一部かも知れない。

今、これらのグループのうち、一代記の体裁をとるものに限り、成立年代順に整理すると次のようになる。

Ⅱ↓Ⅰ↓Ⅳ↓(Ⅲ)

※(Ⅲ)については、今回新たな諸本を披見することが出来なかった。

## 二

ここで累説話と祐天の一代記との相互関係を再考してみたい。

近年巖谷勝正氏は、祐天寺に所蔵される『武州荏原郡目黒墅明顕山善久院祐天寺開山前大僧正明蓮社顕誉上人愚心祐天大和尚伝略記』(享保五年成立、以下『略記』)、

『祐天大僧正実録下書』(享保六年成立、以下『実録下書』)、

『祐天大僧正実録清書』(享保六年成立、以下『実録清書』)、

『鎌倉光明衣寺檀通上人御腹内書附』(享保八年成立、以

下『檀通書附』)などの伝記史料について紹介され、諸本の

対校を行われた<sup>(18)</sup>。これらはⅠ～Ⅴのいずれよりも成立

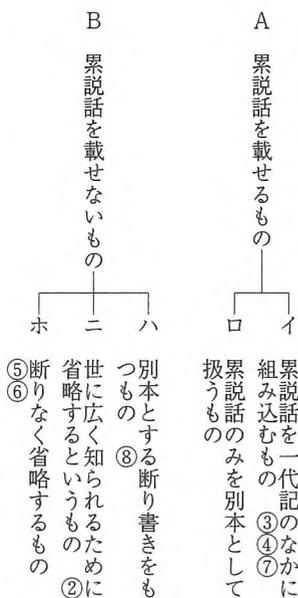
年代が早く、祐天の没後間もなく編まれている。このうち累について触れるのは『檀通書附』のみで、そこには、

「飯沼随遂之頃亡魂説得」と見えている。累の一件は、

祐天が師匠の檀通について飯沼弘経寺で修行していた時期に起こっているもので、ここにある「亡魂」は、累と助の霊を指していると考ええてよいだろう。しかしこの『檀通書付』には祐天の出生や遷化に関して記述がなく、一代記の形態はとっていないようである。それ以前に制作された『略記』や『実録下書』『実録清書』には、累についての言及がない。そこからすると、一代記のなかに累説話が組み込まれたものでもっとも早いものは、宝暦十三年以後に成立したⅡということになる。

ところがⅡの諸本のなかには、累説話を載せるものと載せないものがある。大別すると次のようなグループに分けることが出来る(表2)。

(表2)



イのグループは、一代記のなかに累説話を組み込む。

この場合、累説話は⑦のみ「深谷源左衛門亡妻得脱の事」と「儒者窪田伊織と問答の事」の段落の間に位置する以外、いずれも「雲天寺にて説法の事」と「深谷源左衛門亡妻得脱の事」の間に入る。ロのグループは、累説話のみを別本として扱う。今回調査した諸本には、ここに含まれるものはなかった。郡司氏はここに、千葉県立中央図書館本、国立国会図書館本を挙げられる。<sup>(19)</sup>

ハ以降は累説話を載せない。これは「雲天寺にて説法の事」と「深谷源左衛門亡妻得脱の事」の間に、⑧のように「此所に衣川村かさねが得脱の一段を入べき筈なれ共別伝有之故依之除之也」とする断り書きを持つ。すなわち、別伝があるため省略するというものである。ニは「此所へ衣川のかさねが靈魂とくだつの件をかき入申べき処なれどもあまねく世の人々しる故に爰にりやくするものなり」と、世に広く知られるために省略するという断り書きをもつ。②は「雲天寺にて説法の事」の段のあとにこの文言がくる。最後のホは何の断りもなく累説話が省略されるものである。⑤⑥がこのグループに属する。累説話を一代記に組み込むものは、「雲天寺にて説法の事」と「深谷源左衛門亡妻得脱の事」の間に「累物語

の事」が入ること、省略するものも同じ章段の間に断り書きが見えていることから、Ⅱは本来「雲天寺にて説法の事」、「深谷源左衛門亡妻得脱の事」の間に累説話を収録するかたちで書承されていたのだろう。だとすれば、イの諸本は伝本として初期の形態をとどめているグループだと言える。

ところが現存する諸本には、累説話を組み込まない一代記のほうが多い。郡司氏調査分を含め、現段階までに確認出来た二一本のうち、累説話を一代記に組み込むものが六本、別本とするものが二本で計八本ある。<sup>(20)</sup>残る十三本が累説話を省略する。<sup>(21)</sup>しかも累説話を含むものは、半数が明治以降に出版された活字本なので、現在写本の形態で残るものとしては四本を数えるのみである。さらにそのうちの③などは、明治期に書写されたものである。このように伝存する諸本には、初期の累説話を含む伝本よりも、むしろ後に省略された伝本のほうが数多く残っている。ここから推測出来るのは、祐天の一代記はむしろ累説話を含まないもののほうが一般的に流布していた形態なのではないか、ということである。つまり、『解脫物語』は必ずしも祐天一代記の一齣として展開したわけではないと言い得るのではないだろうか。

加えて、これまでの研究ではあまりふまえられてこなかったが、累説話がⅡの一部として成立したのではないことも、改めて指摘しておく必要があるだろう。累の一件は、すでにⅡ以前に成立した『古今犬者聞集』（以下『犬者聞集』）に伝えられている。<sup>22)</sup>したがって、従来「解脱物語」が祐天伝の一部として成立・展開したとされてきた説は、いま一度見直されるべきであろう。特に各々の成立に関しては、さらなる検討が必要なのではないだろうか。

### 三

それではⅡはいつごろ、どのような状況のもと編まれたのだろうか。以下、そのことを明らかにするために、祐天が行った布教活動について考察していくことにする。現存する資料からは、祐天が在世中からしばしば談義・説法を行なっていた様子が読み取れる。例えば『犬者聞集』には、累説話以外に「臨終正念の事」「母が念仏功力によつて子供浮ぶ事」「悪霊一夜別時念仏二退く事」「弘法大師十念名号之事」「西天和尚十念之事」といった祐天の靈験利益譚が収録されている。これらは当時の祐天の教化活動について、次のように伝える。

#### 『犬者聞集』卷一二

「弘法大師十念名号之事」

……其後高野山明遍僧都、法然上人帰依し玉ひて、師弟のちきり浅からさりしかは、此名号は祖師の御筆なれはとて、僧都にゆつり玉ひし。此御事を、上州館林常光寺にて、祐天和尚談義せられしを、名主聴聞して帰り（略）

「西天和尚十念之事」

……此くわたいには、千日寺に行て、通夜談義せよと師命を受けて、一夜九座法談せられし。翌日早天に、三里へたてし法花村のもの三人来て曰、我村にあるもの、死にやらて苦痛身をせめ悩乱せしを（略）、只今千日寺にて西天和尚の十念聞ゆそやとて、手を合、念仏数百遍（遍）唱て、終に息たへ侍りし。

（引用は『京都大学蔵大物本稀書集成』第七巻、三〇〇頁、三〇二頁による。傍線筆者）

右は、師に従い飯沼弘経寺に隨身していた時の出来事を記す。この時期、祐天は館林常光寺や千日寺など近隣の寺院で頻繁に説法を行い、多いときには一夜に九座もの説法をこなすほど精力的な活動を行っていたようである。

師・檀通が没した後、祐天は諸国を遍歴し修行を重ねたが、貞享三年（一六八六）には江戸牛島に庵を結んで隠棲している。I①は、この間の祐天の活動を「書寫<sub>二</sub>佛號<sub>二</sub>日數百幅」と伝える。<sup>(23)</sup>祐天によつて書かれた名号は様々な奇跡を起こすと評判になり、それにまつわる靈験譚が次々と報告された。この時に記録されたのが大谷大学図書館所蔵『祐天大僧正御化益日記』（以下『御化益日記』）であり、その一部を編集・刊行したものが<sup>(24)</sup>だった。この『御化益日記』の特徴は、⑭に収録されないような教化の記事が見られることである。それらは靈異が示されるような内容ではない。

例えば五十二丁裏には、遠国勤めを命ずる主君から離れ、浪人を志す町医者に対し、祐天が以下のように説く話が見える。

『御化益日記』五十二丁表

……極樂往生の爲には主人程難有事はなし、居食住思、無心にたかへす念仏して、急度主人へ勤なは、いかなるもうそう悪念も消へ、善人の申念仏なれば往生疑なし（略）  
（句点・傍線筆者）

引き続き祐天が言葉を尽くして道理を説いたところ、医師はようやく得心し帰っていったという内容だが、『御

化益日記』には右のように、主君への勤めを極樂往生の手段として説く箇所がいくつか見られる。

六十丁表から六十丁裏にかけては、日頃から主人に不満を感じていた武士に対して教化を行ったと記録する。この時、祐天は師匠の檀通が見聞したこととして、おおむね次のようなエピソードを話している。

『御化益日記』六十丁表～六十丁裏

八百石取りの家老、牧野十郎右衛門は主人の死によつて家老職を取り上げられてしまふ。家中が笑ひ者にするのも一向に気にしない様子の十郎右衛門だったが、ある時懇意にしていた友人に対し、もし今、自分が周囲に恥じて浪人すれば、主人であった伊豆守の罰があたり、狂乱し路頭に迷うであろう、そのことを思えばいかなる奉公でも勤め、亡き主君への恩に報いようとするのである、という心境を語る。

その後間もなく、十郎右衛門は再び家老職を命じられるが、これは「誠をもつて奉公」を尽くした結果だとし、最終的には「現世も未来も誠が大切也」と、庵室にきた武士を二世の決定へと導いている。注目すべきは、このように主君へ仕えることの意義を述べるなかで、師匠・檀通との関係について、祐天自身が語る部分である。

四

『御化益日記』六十三丁裏から六十九丁表にかけては、「元祿四年末二月二日」に「私」という人物が、庵室で受けた教化を記録する。

庵室へ訪れた「私」は、臨終に備え常に決定を心がけるのだが、周囲の讒言を恐れ、なかなか安心することが出来ない<sup>イ</sup>と相談する。それに対し祐天は、悪念があつてこそ凡夫なのであり、たとえ讒言する者があつても忠義を思えば恨みはない、と説き聞かせる。さらに祐天は、出家以来隨身した檀通のもとの経験<sup>ウ</sup>を、次のように語っている。

『御化益日記』六十五丁表～六十八丁裏

(1)我等は十一才の時伯父坊主か連来て師匠の許へ渡し、出家ならずは小者にして御つかひ候へとくれられたり、夫出家致れども只師匠の氣に入らず、にくみ付られく

(2)三十一年か間ならまれたるうちの悲しき、苦勞のほとと云語に延難く、則爰に居らる、浅茅か原の蓮花院の克知られたり、

(3)師匠は増上寺に数ヶ年の功をつみ、立林善導寺へ入

院相究り、近日発足なれ共、我等は供に連行共捨置とも、兎角の云付も無(略)

老僧衆の仰には、好聞合よ(略)方丈様御意には、其小僧は連行やと御尋ありしに、師匠の返答に小僧は捨置ますると被申候間、克聞合よと被申候に付、

我思ふ様、爰に残りなは見限り捨られし者迎誰も憎くみこそすれ不便といふ物あらし、然は乞食より外なし、打殺されなは夫迄よと思ひ定め、弥しかと支度して御発足の日は朝早く出(略)

(4)隨身の衆はいち／＼に役割あれ共、我には何の役も無いか、と思ふ内に、長四郎と云小者と我と相役にして、飯台の給仕を被申付、諸家衆の給仕(略)

(5)其後飯沼ぐきやう寺にいてんの後、師匠以外の外煩ひ被申候(略)

その節八幡宮と観音と両所へ、此度師匠伝通院へ入院の儀御延引被遊、何方ののうけ衆成とも被遣被下候へと度々願を立、一七日はだし参りを致す(略)

(6)私をは三十一年之間御意をも不被下、いかなる思召に御座候や、と申上候へは、其時師匠の仰には、三十一年之間白眼付たれはこそ夫程の坊主には成たりと被仰けり、三十一年か間憎くまる、御心の内、い

か斗の御仁心にましく／＼のことやと思へは、胸ふ  
さかり泪こぼる、泣、御落泪被遊候

(句点・傍線筆者)

(1)から(6)にかけては祐天の出家、館林善導寺・小石川  
伝通院の歴住、檀通の遷化までが記される。十一才で出  
家してから檀通が遷化するまで、師との関係は決して円  
満だったとはいえず、むしろ「にくみ付られ」ていたと  
祐天は回顧している。じつはこうした師との関係は、祐  
天の一代記における重要なプロットであった。

一代記のうち、(師匠からの勘当)という設定を設ける  
のはⅡⅢⅣである。なかでもⅡでは、全体の約四分の三  
を占める割合で師匠からの勘当が描かれており、この設  
定が作品を貫く主題になっていると言つてよいだろう。  
興味深いのは、こうした師との関係を祐天が自ら語つて  
いる点であり、それを記録した『御化益日記』の文言・  
文脈がⅡとかなり一致している点である。

まず(1)では、祐天の出家と檀通との出会いが語られる。  
傍線部Aには「我等は十一才の時伯父が連来て」とあり、  
祐天が十一才の時、伯父の許から出家したとする。Ⅱで  
は伯父である池徳院休波に預けられたとし、出家の時期  
を十一才としている。これは他のⅠⅣなどの伝記類とは

異なり、Ⅱとその影響を受けて成立したⅢのみ一致が見  
られる。また傍線部イのように、檀通のもとへ預けられ  
たものの、何故か師匠の心に適わなかったという記述は  
Ⅰになく、Ⅱ以降、そうした師弟関係が(勘当)という  
言葉で表現されている。この勘当はⅡにおいても、檀通  
が遷化するまで赦されなかった。

(3)は檀通が館林善導寺へ移る際、陰ながら隨身しよう  
とした祐天を周囲が強く諫めたとする部分だが、この部  
分はⅡにおいて次のように記される。

『祐天上人』「檀通和尚館林善導寺へ御入院の事」

并祐天が勘当御免訴訟の事」

(3)台命に依て檀通和尚は、上州館林善導寺へ御直り有  
るべきに極まりければ(略)

工 檀通を語ひ各々檀通の前へ出で申されけるは「(略)

祐天御勘当此節御免下されなば、何れも有難く存じ  
奉る」と皆々頭を畳に付けて述べらるゝに、檀通仰

せらるゝは(略)「祐天は当山へ残し置き申べくに  
付(略)又発足の御見苦しき体にて供など致し附添  
ひ候事、兼て致さざる様御申渡し下さるべし」と少  
しも勞りなく仰せられければ、(略)祐天心に思ふ  
様、我御弟子で有りながら、眼前師の御入院なるに、

何とて当山に残るべき、仮令裾を結び肩に掛け、乞食非人の体にてても、御供致さで置くべきやと、少しも弱る気色なし、

(引用は『近世実録全書』八、一八一―一九頁による。傍線筆者)

右と『御化益日記』の記事とを比較すると、細かな文言は異なるが、傍線部エ・周圀が祐天の隨身について尋ねたところ檀通は残し置くことと宣言したこと、傍線部オ・周圀の反対にもかかわらず祐天が隨身の決意を固めたことがおおむね『御化益日記』(3)傍線部エ・オと一致している。また『御化益日記』(4)傍線部カには「長四郎」という人物と飯台の給仕を勤めたとあるが、Ⅱにおいても善導寺までの道中、「方丈様のお草履取長四郎」という人物と行動を共にしたとする。同じくⅡには、善導寺へ移転した後、「祐天には誰有て役儀を申付くる者もなければ、下人の給仕飯台場にて洗ひ磨き杯を勤めける」とあり、<sup>(26)</sup>ここでも文言、人名の一致が見られる。

(5)は祐天が檀通の延命を八幡と観音に断食祈願する場面<sup>(27)</sup>で、これもⅡには、祐天が三七日の断食祈願を行ったとある。

最後の(6)は、これまでの冷遇を師匠に問い正す場面

ある。Ⅱはこれについて、次のように詳細な理由を挙げている。

『祐天上人』「檀通方丈遷化の事」

并祐天増上寺へ帰山の事」

(6) <sup>キ</sup>扱又此年迄勤当致し置く事、三ツの謂あり、一ツには我傍らに幼年より置く時は、総領弟子の事故、諸方より厚待され、(略)身の安楽に随ひ、学問怠るべし、二ツには今世間の所化共を見るに、兎角衣服を飾り候より、学問は次の事となり、遂に出家の道を取失ふ者多し、依て汝には是迄不自由に暮させしなり、三ツには総領弟子たるを以て、權威を震ひ諸人を目下に見下し、自から人の誹謗を請け身の仇と成る事あり(略)

<sup>ギ</sup>思へば是も当分の事、末の出世こそ大切なれ(略)

(引用は『近世実録全書』八、九二頁による。傍線筆者)

傍線部キ以下では勤当を赦さなかつた理由を三つ挙げ具体的に記している。しかし、ギで今までの試練を檀通の配慮によつてもたらされたものと説明する大筋は、『御化益日記』の内容と大差ない。つまり、Ⅱの主題とも言える師からの勤当というモチーフは『御化益日記』にも見えているのであり、ここから両者の間になんらか

の影響関係があつたと想像出来るだろう。

先にも触れたが、この話は臨終の障りについて質問にきた信者に対して、忠義の意義を説く場で語られていた例話だった。この話を引用する直前、祐天は次のような教化を展開している。

『御化益日記』六十四丁・裏

恩を知らぬは畜生なれはこそ不忠不儀之者よ、不忠者なれば御本願に背く、御本願に背けば決定往生はならぬぞ、とにも角にも主人の為に命を失ふこそ本意成そ、自分のいこんにて死なは往生は不成也、悦も嘆きも皆主人の御影よと御恩を悦御念仏申し、臨終は御本願に任置、現世は身命を主君へ任すへし、只善悪共に堪忍、堪忍は主君へ命を差上たさの堪忍よ(略)南無阿弥陀仏と堪忍か第一也

(句読点、傍線筆者)

右では、忠に背けば本願に背き、本願に背けば往生は不可能であると説く。同時に、臨終は本願に任せ、現世の渡世は主君に任せるべきだとも述べる。ここにおいても、忠義を尽くすことが極楽往生への手段となる、という論が展開される。さらに諸々の善悪に対しては「堪忍」することが肝要であり、最終的には「堪忍」と「念

仏」が二世を救済する、という論へと帰結させる。すなわち祐天と檀通との関係は、師や主君へ忠義を尽くすこととの意義について述べ、二世の願を成就させるために必要な「堪忍」を説くために引かれた例話のなかで語られていたのである。

すでに近時、『松平開運録』なる一書のなかで仏教治国策が展開され、その一書が観智国師から随波、檀通、祐天へと連なる法脈のなかで伝承された可能性があることは大桑齊氏により明らかにされている<sup>(28)</sup>。仏教治国策というものが念仏によって人々の往生を定め、それを治国へと連ねるものだったとすれば、主君への忠義を尽くすことで往生を定めようとした祐天の教化もまた、仏教治国策の一端を担う言説だったと言えるのではないだろうか。加えて『御化益日記』(2)傍線部ウでは、祐天と檀通との関係を証言する者として、「浅茅か原の蓮花院」を挙げる。祐天の側近たちによって記録された『略記』『実録下書』『実録清書』には、祐天が貞享三年春に増上寺を引退した後、「浅茅蓮華院」に一時身を寄せていたとある<sup>(29)</sup>。この「浅茅蓮華院」は祐天や檀通にとつて縁が深く、同じく随波の法系にあつた宗廓が開いた寺院であつた<sup>(30)</sup>。『御化益日記』の記す「浅茅か原の蓮花院」が

「浅茅蓮華院」だったとすれば、祐天と檀通の話もまた、随波、檀通、祐天から繋がる法系のなかで伝えられた可能性もある。

いづれにせよ、十一歳での出家・檀通との関係・随身中の苦難といった一代記の原型とも言うべき話題は、「元禄四年末二月二日」の教化の場まで遡ることが出来た。しかしこの時点はすでに『解脱物語』が刊行された後なので、やはり累説話が一代記の一齣として成立したのは今のところあり得ないと言えるだろう。とはいえ、累も一代記も祐天の教化を母体として発生したものであったことははや疑うべくもない。唱導・勸化の話題から文芸化への経路を辿った累説話同様、祐天一代記もまた近世怪異小説におけるひとつの典型的な流れに沿って展開したものであったのである。

以上、新たに調べた祐天一代記の諸本をもとに、累説話との関係、一代記の成立背景などについて若干の私見を述べてきた。確認したかぎりでは、初出である『犬著聞集』や『解脱物語』の成立より遡るものがなかったことから、累説話は祐天一代記の一齣として成立したのではなく、むしろ説話がある程度流布した後、一代記が編

まれたと考えるほうが自然ではないかと考えるに至った。そしてさらに、教化の記録である『御化益日記』とⅡに共通する文言が見られたことから、累説話同様、一代記もまた、布教のために語られた話題から発展した可能性が高いと推測出来た。これらのことが明らかになったうえで考えたいのは、その後Ⅱがどのように広められたか、という点である。これについては新たに、浄土系唱導僧と講釈師との繋がりを考えなければならぬように思うが、それは今後の課題となる。

#### 註

- (1) 特に芸能作品における〈累もの〉について論じたものに、高野匡子「鶴屋南北の累狂言研究」(『駒沢短大國文』第一三〇号、昭和五八年)、高橋則子氏「南北累物狂言作劇考」(『文学』第55号、昭和六十二年四月)などがある。
- (2) 祐天が江戸市中の庶民のなかで積極的な布教活動を行っていたことは、高田衛氏『江戸の悪霊祓い師』(筑摩書房、平成三年)に詳しい。
- (3) 服部幸雄氏「累曼陀羅」(『変化論』一三三頁、昭和五十年、平凡社選書)
- (4) (3) 一三六―一三七頁。

- (5) 堤邦彦氏「作者未詳『死靈解脱物語聞書』」(『國文学  
解釈と教材の研究』第三七卷九号、平成四年八月)
- (6) 郡司由紀子氏「祐天の一代記を中心とする累説話の研  
究」(『国文』五二号、昭和五年)
- (7) 郡司由紀子氏「祐天の一代記に関する研究」(『国文』  
五五号、昭和五六年)
- (8) 近年では巖谷勝正氏によって、祐天が没した直後に編  
纂された伝記について報告がなされているが(増上寺  
第三十六世顕誓祐天の経歴―その二・三の問題―、『大  
正大学大学院研究論集』第二十号、平成八年)、文芸化  
された「普及本」の諸本整理はなされていない。
- (9) (7)三六頁～三七頁
- (10) (7)三二六頁
- (11) 『国史大辞典』(吉川弘文館、昭和六十年)、「実録物」  
の項
- (12) (6)三二頁
- (13) (6)三十一～三二頁  
横山邦治氏「『幡随意上人諸国行化傳』と「祐天上人  
一代記」と」(『国文学攷』四五号、昭和四三年)
- (14) すでに井上敏幸氏「『死靈解脱物語聞書』攷」(『讀本  
研究』第十輯上套、平成八年)によってその存在が指摘  
されている。氏は九大本『祐天大僧正利益記』の成立が、  
大谷本『祐天大僧正御化益日記』よりも二十年近く遡る  
とされるが、両者の前後関係や説話の流れについては稿  
を改める必要がある。
- (15) 国立国会図書館蔵『開帳免許帳』宝暦元年の条および
- (16) 『増訂武江年表』二、八六頁(昭和四三年、平凡社)  
『増訂武江年表』一、一五三頁、一七八頁、二〇四頁  
「ク」二、二二頁、五三頁
- (17) 累説話の伝播と開帳の関係については、拙稿「数珠  
繰り」の習俗と江戸戯作―南北・京伝の趣向をめぐつ  
て―(『説話・伝承学』八号、平成二年四月)を参  
照のこと。
- (18) (8)に同じ。
- (19) (6)二九頁  
『祐天記』(千葉県立中央図書館・郷土資料室、C一  
八―Y九六―一・一―三)、『祐天大僧正御伝記』(国立  
国会図書館、一八八・六Y九九六)の二本。
- (20) (19)の二本と③④⑦、『祐天上人』(『近世実録全書』  
八、昭和三年、早稲田大学出版部)、※『祐天上人一代  
記』(国立国会図書館・特二―一六三三、明治一九年、  
金星堂)、※『祐天上人御実傳記』(国立国会図書館・特  
一―九九八、明治二六年、龍雲堂)を合わせた計八本。  
尚、以下の(21)を含め、※については新たに累説話  
の有無と位置のみ確認した。
- (21) ②⑤⑥⑧と(6)二二頁に挙げる以下の諸本を含めた  
十三本。  
ハ『祐天大僧正御伝記』(成田図書館・五―七三三〇―  
六)、『祐天大僧正伝記』(内閣文庫・一九三―七)、※  
『祐天大僧正傳記』(慶応大学図書館・一三三―一九  
四―二)
- ニ『祐天大僧正御伝記』(成田図書館・ち―七三三〇―

五)、『祐天大僧正御伝記』(成田図書館・五―七九―八九)、『祐天大僧正御伝記』(千葉県立中央図書館・宮本文庫)、※『祐天大僧正御傳記』(国学院大学図書館・Ⅲ一六四六)

ホ『祐天大僧正御伝記』(成田図書館・ち―七三二〇―二)、『祐天大僧正御傳記』(東大史料編纂所・四一―一五―六)

(22) 累説話の初出が『大著聞集』であることは、松田修氏によって指摘されているが(『大著聞集管見』、『西鶴研究』復刊第四号、昭和二十六年)、井上敏幸氏は前掲論文(14)において、この事実がその後の研究において踏まえられないとされている。

(23) I①『祐天大僧正傳』二丁表

(24) 拙稿「大谷大学附属図書館蔵『祐天大僧正御化益日記』について」(『文藝論叢』第四九号、平成九年九月)。  
尚⑬九大本『利益記』は、⑭刊本『利益記』で削除され

た記事のみを収録している。

(25) 『祐天上人』(『近世実録全書』八)によって数えた説話総数三五のうち、二八話までが勘当中の祐天の姿を描く。

(26) 『祐天上人』二一―二二頁。

(27) 『新著聞集』往生編第一三「壇通和尚遺骨舍利」(『日本随筆大成』二期五、吉川弘文館、平成六年)にも、師の臨終に際して祐天が祈禱堂に籠もり祈願したという話が見えている。

(28) 大桑斉氏「『松平崇宗開運録』覚書」(『近世における仏教治国論の史料的研究』平成10・11年度科学研究費補助研究成果報告書、平成二二年)

(29) (8)に同じ。二六八頁

(30) (8)に同じ。一六七―一六八頁

(大谷大学大学院博士後期課程)